

2019年4月25日／浪宏友ビジネス縁起観塾

正しい生活

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄著『阿含經典2』（ちくま学芸文庫）／実践の方法（道）に関する經典群／道相應／6分別

(2) 主題

八支の聖道（八正道）のうち、正思・正語・正業・正命について、学んでみたいと思います。

2. 八支の道

(1) 経文「分別」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァッティー（舎衛城）のジェータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。

その時、世尊は、もろもろの比丘たちに告げていった。

「比丘たちよ、いまわたしは汝らのために聖なる八支の道を説こうと思う。ひとつ、それを汝らのために分析してみようと思う。よく注意して聞くがよろしい。そして、よくよく考えてみるがよろしい。では、わたしは説こう」

「大徳よ、かしこまりました」

と、彼ら比丘たちは世尊にこたえた。世尊は説いていった。

「比丘たちよ、いかなるをか聖なる八支の道というのであろうか。いわく、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定である」（増谷文雄編訳『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p.172）

(2) 釈迦牟尼世尊の説法

この経文では、釈迦牟尼世尊は、修行者たちに、これから八支の道を説くから、よく注意して聞きなさいとおっしゃいます。

そして、教えを聞いたなら、よくよく考えてみるがよろしいとお勧めになります。

これに対して、修行者たちは、その通りにいたしますとお応えします。

こうして、教えを説く釈迦牟尼世尊と、教えを聞く修行者たちの気持ちが一つになったところで、説法が始められます。

(3) 分析

「分析（ぶんせき）」とは、「分解して明確にする」というような意味です。ここでは、「ひとつひとつ、詳しく説明する」というような意味だと思います。

(3) 八支の道

八支の道とは、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定です。

経文「無智」（増谷文雄著『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p. 161～163）では、次のように表現しています。

正 見：正しい見方

正 思：正しい思い

正 語：正しい言葉

正 業：正しい行為

正 命：正しい生き方

正精進：正しい努力

正 念：正しいことに念いをこらす

正 定：正しいことに心を專注する

(4) 今回の学習

今回は、「正思・正語・正業・正命」について、学ばせていただこうと思います。

3. 正思

(1) 経文「分別」

「比丘たちよ、いかなるをか正思というのであろうか。比丘たちよ、
迷いの世間を離れたいと思うこと、
悪意を抱くことから免れたいと思うこと、
他者を害することなからんと思うことがそれである。

比丘たちよ、これを名づけて正思というのである」（増谷文雄編訳『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p. 173）

(2) 正思

「正思」とは、「思うこと、考えることを正しくする」ことです。

(3) 迷いの世間を離れたいと思う

- ① 「迷いの世間を離れたい」とは、「自分はこれまで、迷う人々にあふれた世間の中で、自分も迷い続けてきた。これからは、世間にあっても、迷うことなく生きていきたい」ということでありましょう。

これを、「迷いの世間から離れて、人里離れた山奥で暮らしたい」と受け取ってはならないと思います。

- ② 「蓮華は、泥沼にあっても美しく咲くように、迷う人々にあふれた世間にあっても、尊い教えを實踐して、正しく生きていこう」という、妙法蓮華の精神を思い出すべきでありましょう。

(4) 悪意を抱くことから免れたいと思う

① 「悪意を抱くことから免れたいと思う」とあります。

「悪意」とは、「真理から外れた思いや考え」です。

「悪意を抱く」とは、「真理から外れた思いや考えが、心の奥から湧き出してくる」ことを言っているのではないのでしょうか。

「免れたい」とは、「真理から外れた思いや考えが、どこからも湧いてこない自分になりたい」ということでありましょう。

② 『ダンマパダ』に、次の句があります。

「善をなすのを急げ、悪から心を退(の)けよ。善をなすのにのろのろしたら、心は悪事をたのしむ」(中村 元訳『ブッダの真理のことば 感興のことば』岩波文庫、p. 26)

(5) 他者を害することなからんと思う

① 「他者を害することなからん」とあります。

他者を害する心や行為は、「瞋恚(しんに、怒り)」から生じます。

「他者を害しない自分になる」とは、「瞋恚を起こさない自分になる」ことです。

② 仏教では、瞋恚から生まれる、人を害する心として、次のようなものを上げています。

忿(ふん)：相手から攻撃を受けたとき、その相手をやっつけようとする動作につながる怒りです。

恨(こん)：相手から攻撃を受け、その相手に対して怒りを起こし、その怒りがずっと続くことです。これが爆発して、相手を害することもあります。

惱(のう)：怒りを起こして、暴言を吐くことです。相手が触れられたくないところを乱暴な言葉で抉り出すようなこともやりかねません。

嫉(しつ)：嫉妬する心です。ここから、相手を害そうとする心が生じることもあります。

害(がい)：瞋恚を起こし、平気で相手を害する、冷酷、非情な心です。

(6) 忍辱の心

法華三部経の開経『無量義経』の「十功德品」に、「瞋恚盛んなる者には忍辱の心を起こさしめ」とあります。

これについて、庭野日敬師は、つぎのように解説しています。

「瞋恚(怒り)のくせのあるものも、仏の心を心とすれば、他人からどんなことをいわれても、どんなことをされても怒る気持ちがなくなり、恨む心も起こりません。逆に、『ああかわいそうな人だ、なんとかしてあのまちがった心を直してあげたい』という心が起こってくるのです。しのび難きをしのび、たえ難きをたえる心、これが忍辱なのです」(庭野日敬著『法華経の新しい解釈』佼成出版社、p. 60)

5. 正語

(1) 経文「分別」

「比丘たちよ、いかなるをか正語というのであろうか。比丘たちよ、偽(いつわり)りの言葉を離れること、中傷(ちゅうしょう)する言葉を離れること、麤悪(そあく)な言葉を離れること、および雑穢(ぞうえ)なる言葉を離れることがそれである。

比丘たちよ、これを名づけて正語というのである」(増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.173)

(2) 正語

「正語」とは、言葉を正しく使うということです。言葉を正しく使うことは、正しい人間関係を結ぶことを意味していると思います。

(3) 偽(いつわり)りの言葉を離れる

「自分の利益のために、事実と異なることを語ることをしない」ということです。偽りの言葉をひとつ語ると、それが偽りであることを隠すために、次から次へと偽りを語り続けなければならなくなると言われています。

(4) 中傷(ちゅうしょう)する言葉を離れる

「他人の名誉を傷つけることを言わない」ということです。自分を正当化するために、他人を悪く言うというようなことが、世間ではよく行われています。それを真に受ける人も少なくありません。

そんなことをしてまで自分を守ろうとしても、自分のしていることから自分を守ることはできません。こんなことを繰り返していると、他人の悪いところばかり探して言いふらすというような、卑しく貧しい人格に成り下がり、人から疎まれるようになるのがおちです。

(5) 麤悪(そあく)な言葉を離れる

「粗暴で荒々しい言葉を使わない」ということです。乱暴な言葉遣いを続けていたり、悪口を言いたてて怒鳴り散らすようなことをしていれば、次第に周囲から人が居なくなります。

(6) 雑穢(ぞうえ)なる言葉を離れる

「何の役にも立たないことを言ったり、無理やり笑いを要求するようなくだらない駄洒落(だじゃれ)などはよそう」ということです。

中身のない話ばかりしていると、本人の中身も無くなってしまふと言われています。

洒落(しゃれ)、ユーモア、冗談(じょうだん)などは、一種のレトリック(表現技術)であることを心得て、正しく使うように、心がけたいものだと思います。

6. 正業

(1) 経文「分別」

「比丘たちよ、いかなるをか正業というのであろうか。比丘たちよ、殺生を離れること、与えられざるを取らざること、清浄ならぬ行為を離れることがそれである。

比丘たちよ、これを名づけて正業というのである」(増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.173)

(2) 正業

「業」とは、ここでは「行い」ということです。「正業」とは、正しい行いをするということです。

(3) 殺生を離れる、

「殺生を離れる」とは、「『いのちあるもの』の生命を無用に断たないようにする」ということです。

人間は、動植物を食物としています。これをやめるわけにはいきません。それならば、命をいただいた動植物に感謝しつつ、意義ある人生を歩むことによって、いただいた命を意義あるものとさせていたいただきたいと思います。

「時間の殺生をするな」、「水の殺生をするな」、「電気の殺生をするな」というような戒めもあります。

(4) 与えられざるを取らざる

「与えられたもの」とは、「正当な手続きで自分の所有になったもの」です。

「与えられざるを取る」とは、「不当なやり方で、自分のものにする」ことです。

窃盗、強盗、詐欺、恐喝などの犯罪は、与えられざるを取っています。

他人の手柄を横取りする。自分の失敗を隠すために、他人に罪を着せる。地位や名誉を、金銭で買う。こうしたことも、与えられざるを取るの中に入るのではないのでしょうか。

「悪銭身につかず」と言います。「不当な手段で得た金銭は、結局つまらないことに使ってしまい残らないものだ」という教えです。不当なやりかたで得たものは、自分を幸せにする役には立たないということでありましょう。

(5) 清浄ならぬ行為を離れる

「清浄ならぬ行為」とは、通常、「道ならぬ性的関係を結ぶ」ことを意味します。このような関係は、私的にも、社会的にもトラブルのもととなります。

世間では、しばしば、道ならぬ性的関係がスキャンダル(よくない噂、醜い事件)になって、大騒ぎになったりしています。

7. 正命

(1) 経文「分別」

「比丘たちよ、いかなるをか正命というのであろうか。
比丘たちよ、ここに一人の聖なる弟子があり、
よこしまの生き方を断って、
正しい出家の法をまもって生きる。
比丘たちよ、その時、これを名づけて正命というのである」

(増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.173)

(2) 正命

「正命」とは、「正しい生活」、「正しい生きかた」という意味です。
経文では、出家者の正しい生活として述べられていますが、その内容は、在家者でも同じことが言えます。

(3) よこしまの生き方を断つ

正語・正業のところで学んだような誤った言葉や行為で生活の糧を求めると、「よこしまな生き方」になってしまいます。こうした、よこしまな生活を断ち切って、正しい生活に立ち戻ることを「よこしまの生き方を断つ」と言っているのだと思います。

(4) 正しい出家の法をまもって生きる

この経文では、出家修行者の正しい生活法と述べています。釈尊教団の修行者たちは、一定の規律の中で修行を進めていました。

出家者は、法談(教えを話し合う)と瞑想を中心に、生活していたと思われます。

食物を得るための托鉢(たくはつ)、洗濯・清掃などの雑事、沐浴・休息・睡眠なども節度をもって行なわれていたようです。

(5) 在家者への教え

在家者もまた、正しい生活の法をまもって生きるべきでありましょう。

仏教における「戒」には、「正しい生活習慣」という意味があると聞いたことがあります。
それぞれの生活の中で、正しい日常生活をおくることが勧められているのだと思います。

8. 人間関係の教え

八正道は、自分の人格を高める教えであると言われてしていますが、その中には、正しい人間関係を結ぶことも含まれています。

「正思・正語・正業」の教えには、人間関係を前提とした内容が説かれています。「正命」には、社会的な内容が含まれていると思われます。